

令和4年度 前期学位記授与式 式辞



本日、学部を卒業し学士の学位を得た14名の皆さん、大学院修士課程並びに博士前期課程を修了し、修士の学位を得た2名の皆さん、学位取得おめでとうございます。

2020年早々に日本国内1例目の罹患者が確認された新型コロナウイルス感染症は、その後、現在に至るまで、本学の教育、研究、そして課外活動に大

きな影響を与えてきました。かつてない厳しい環境の中で、学業を全うされた皆さんに、本日このように学位を授与できることを、列席しております理事・副学長、学部長そして本学教職員とともに心よりお祝い申し上げます。

今年、2022年の干支は、壬寅（みずのえとら）の年にあたります。ご存知の通り、干支は十干と十二支の組み合わせでできています。十干は陰陽五行思想に基づいたもので、甲（きのえ）、乙（きのと）、丙（ひのえ）、丁（ひのと）、戊（つちのえ）、己（つちのと）、庚（かのえ）、辛（かのと）、壬（みずのえ）、癸（みずのと）があります。これらは順序の表記に使われますが、本来、生命の栄枯盛衰の循環過程を表しており、最初の甲（きのえ）は草木の芽生え、転じて物事の始まりを意味します。十番目の癸（みずのと）は、種子の中で新たな生命が徐々に形作られ、再生まであと少しの状態を指します。

一方、十二支には、みなさんご承知の通り、子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥があります。今ではそれぞれ動物と関連づけられていますが、本来は季節に従って植物が変化していく様子を表す12段階を指しています。一番目の子は、新しい生命が種子の中に萌し始める状態を表し、十二番目の亥は草木の生命力が種に閉じ込められた状態を表します。

このような解釈に基づきますと、今年、植物の内部に種子が生まれた状態を指す「壬」と、春が来て草木が生じる状態を表す「寅」が組み合わされた年となります。従って、新しく生まれたものが大きく成長する年という意味を持ちます。このような年に卒業を迎える皆さんは、和歌山大学で培った力を社会での活動に、そして新しい社会を切り拓くための活動に使う準備ができており、まさに今その力を示そうとしている状態にあります。

さて、社会に目を向けますと、現代社会は多くの課題に直面しています。気候変動による異常気象や新型コロナウイルスの蔓延、ウクライナにおける戦火などの世界規模の課題に加え、緩やかに進む社会自体の変化に伴う中小の課題が顕在化してきています。人口減少に

よる地方での行政や経済における問題、限界集落の問題や地方部における公共交通のあり方、あるいは企業におけるDX推進による業務改善などが例として挙げられるでしょう。

このように多くの課題を持つ社会の中で、自らの役割を果たし、社会変革の当事者となることを皆さんは期待されています。例として挙げた現在我々が直面する課題の多くは、多数の要因が複雑に絡み合っており、一つの専門知識の応用や一つの活動で解決できるもので



はなく、多方面にわたる専門的な能力や実務の力など、他者の力を集めて解決を図っていくことが必要となります。社会で他者の協力を得るためには、自らの考え方に必要以上に囚われること

なく、新しい考え方を取り入れる開かれた態度が必要となります。和歌山大学は、教育学部、経済学部、システム工学部、観光学部の四つの学部が一つのキャンパスに集まるコンパクトな大学ではありますが、ここでの学びは融合的であり、社会の変化に合わせたものとなっています。特に、全ての学部が1学科あるいは1課程で構成されており、専門的な教育に加えて、領域を俯瞰する学識を身につけるように工夫されています。この俯瞰力が、他者の意見を聞き、まとめるために必要となります。

しかし、他者に頼りっきりとなってしまうと、自らが満足する活動を進めることができなくなることもあります。その際、皆さんの足場となるのが、大学で培った専門力です。その専門力を足場として、確固たる自己を確立し、かつ俯瞰力の下で他者の意見を取り入れることによって、初めて、皆さん独自の課題への解決方法を提示し実行することができるでしょう。

皆さんには、和歌山大学での学修の成果を元に、これまで培ってきた専門力と俯瞰力をさらに研鑽し続け、多くの課題を持つこの社会を明るい未来へと先導する活動を進めていただけることを期待します。

令和4年9月22日
和歌山大学 第17代学長
伊東 千尋